

酩酊

漱

講義、実験、レポート、サークル、そしてバイト……その他諸々の事象に疲弊し切った大学生の、身体と精神を手つ取り早く癒すには、アルコールに頼るのが一番良い。部屋に着くなり、荷物を放り投げた。帰りがけに寄ったコンビニで買ってきた、五〇〇円のアルミ缶を勢いよく開けて、おもむろに傾ける。九割のチューハイを口に含み、刺激的なその風味を味わった。甘味料ではごまかしきれない強いアルコールの匂いに、ほんのすこし顔を歪めながらそれを飲み込むと、口の中に広がる化学的な後味と一緒に、アルコールが喉を焦がす。浴びるように、喉を鳴らして飲み込みながら、ふと、昔読んだ本にあったことを思い出した。私たちが酒を飲んだ時に喉を焼かれる感覚があるのは、生きる間に嘘をついて、喉がだんだんと穢れてしまったから。そして、それを酒が清めるが為に、喉を焼いて焦がすのだ、と。科学的な根拠に真つ向から対抗するような、いやに情緒的で、なぜか心に残っていた、レトリックな文句だった。

それなりに喉は潤ったから、今度はちびちびと緩いペースでチューハイを呑みながら、買い置きしておいた向

日葵の種をつまむ。また、アルコールが喉を焦がしていた。どうやら私の喉も、若いわりにはだいたい嘘で穢れているらしい。けれど、人は誰しも生きていくうちに、嘘を重ねていくものではなからうか、そんなことを思った。実際、それは仕方のないことなのだろう。嘘もなしに生きてゆける人間は、たぶん居ないから。だとすればこそ、嘘で穢れた喉を酒が焼いていく感覚を愉しむのは、我ながら如何なものなのだろうか。恐らく私は、己が嘘や穢れに満ちているというのに、酒が身を焦がす心地よさに耽溺する、不躱な快樂主義者なのだろう。もしかすると、只与えられる快感に身を任せ、享受することしか能のない白痴なのかもしれない。いづれにせよ、ろくでもない輩であることに変わりはないのだけれど。しかし、ポリポリと、ハムスターのように向日葵の種をつまみながらこんなことを考えてもシニールなだけだなど、ひとりで可笑しくなった。

酔いを回そうと、また一気に缶を傾けながら、更に、取り留めのないことを考えた。酒がその役割を変えたのはいつからなのだろう。少なくとも、人々が神々への信仰を忘れ、自由を生きる時代になってから、酒は大きくその姿を変えてしまったようだ。古来、酒は神々の飲み物だった。多くの神話に酒を司る神が存在した。酒はある時には神の子の血であり、またある時には禊に用いる

清浄な存在でもあった。発酵という人智を超えた過程を経て、飲んだ者に酩酊作用をもたらすそれは、常に人々を魅了して止まなかった。しかし、極めて工業的に生成され、酔う為だけに造られたような、今日のストロングな缶チューハイは、少なくともその存在意義を伝統的な酒と異にしているように思えた。夢も希望も持ち合わせない若者の心強い味方の缶チューハイは、神のいなくなつたこの現代にも、清浄で神聖な存在たりえるのだろうか。

更にチューハイを体内に流し込んでゆくと、気分の高揚するのが自覚された。顔が火照って、心臓が強く脈打つのも心地良く感じられた。こうしてみると、アルコールも立派なドラッグだという事実にも合点がいった。一時的ではあるものの、嫌なことを考える脳のリソースを奪ってくれるのは、素晴らしい作用というほかないだろう。単位、就職、人生設計。諸々を忘れさせ、内的な感傷に浸ることを許してくれる合法的存在は、他にない。向精神作用も、古来より重宝された理由のひとつに違いないなど、根拠のない確信を持った。

そのうち、一つ大きな欠伸がでた。どうやら私は酒が強くないようで、呑むとすぐに眠気に襲われる質だった。三大欲求の一角を占める睡眠は、私の身体にとって目下

の最重要事項でもあるらしい。鈍った頭でそんなことを考えた。この酩酊状態を保ったまま、思考の鈍った状態で床に就くのは、最高に心地良い瞬間だ。眠る前の、湧いて止まない夢想から自由になつて、何者も縛られず、速やかに惰眠を享受できるから。重い瞼を支えながら、これから泥のように眠る幸せを思うと、軽く頬が緩んだ気がした。

缶の底に残った一口を音を立てながら飲み干すと、そのままベッドに倒れるように寝ころんだ。着替えもシャワーも済ませていなかったけれど、睡魔には勝てそうになかった。シーツの冷たさと、枕に染み付いた自分の皮脂の匂いが心地よかった。ウトウトと微睡みながら、明日、目を覚ませば、酔いもとづくに醒めているんだなと考えると、すこし悲しく、名残惜しい気分だった。多分明日も、我慢の連続で、思うようにいかない時間を過ごして、夜になればまた、同じように缶チューハイのプルタブを起こすのだろう。言いようのない辛さを、思考能力と一緒に、アルコール漬けにして紛らわすために。

須臾のうちに、繰り返し打ち寄せる眠気の波が、私の意識を遠くへと攫って行った。